

子どもがファシリテーターとして活躍し、 考えを広げたり深めたりする対話型授業

三条市立西鱒田小学校 全の会(128)
星野 智大

1. 主題設定の理由

《担任した学級の子どもたちの実態（令和5年度6年生）》



近くの人と話
してみてください！



すぐに向き合って
活発に話す。

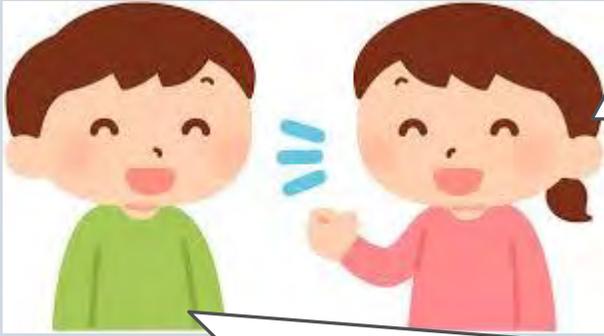
しかし、社会の授業に対して...

「難しい言葉や漢字がたくさん出てくるから、それを理解して自分の言葉で説明することが難しい。」

「調べることはできるが、そこから友達と何を話し合えばよいのか分からないときがある。」

どのように話し合えばよいのか分からない！

《担任した学級の子どもたちの実態(令和6年度5年生)》



話合いで自分の考えを広めたり深めたりできています！(85%)

積極的な話合いができています。

自分の考えを話すことができています。

しっかりと聞くことができています。

表面的な話合いになってしまっている！

対話の質の向上に重点を置いた実践

できていることをくわしく教えて！



《私のこれまでの授業①》

ペア、グループでの話し合い

学級全体での話し合い



T 「～について話し合ってください。」

教師主導の授業では...？

《私のこれまでの授業②》

子どもの発言が多い。



授業者の問いに積極的に答える子や反応が早い子の発言だけで、授業が進行する。その他の子はお客様状態。

教師にとって都合がよい形で進めているのでは...？

《私のこれまでの授業③》

ペア、グループで活発に話をしている。



できた子や考えをもった子が、できない子やわからない子に教えている。
話し合いではないのでは...?

《私のこれまでの授業④》

ペア、グループで活発に話をしている。



わかったことや気付いたことを一人一人が発表して終わっている。
**自分の考えと友達の考えをつなげていない。
深めたり広げたりできないのでは...?**

『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 社会編』

「深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。」

考察、構想・・・自分の考えをもつことの重要性
説明、議論・・・対話の重要性

～学びが深まるとき～

- ・問いをもち、学習問題を自分事に感じたり身近に感じたりする。
- ・自分なりの予想や考えをもって対話に臨む。
- ・わからない子がわからなさを表出する。
- ・話し合いながら、友達の考えとつなげたり比べたりする。

2. 目指す子どもの姿

既習事項と自分の意識とのズレから問いをもち、対話の中で友達の発言に反応したり聴き合ったりすることで、子ども自身がファシリテーターとなって話し合いを促進し、考えを広げ深める。



- ・他者の考えを引き出す。
- ・他者の発言に反応してその考えを受け止める。
- ・考えと考えをつなげて整理する。
→対話を活性化させる。

これらをグループの対話のなかで、子ども一人一人ができるよう期待した。

3. 手立て

学びを深めるための新たな問題

「**相対する事象の提示**(国内に工場があるのに、なぜわざわざ海外の工場を増やすのか。)」

佐藤正寿『図解 社会の授業デザイン 子どもの問いを深める49の視点』明治図書出版 2023

手立て①

学習問題(◎)の設定の工夫

既習事項や生活経験、身近な事象と子どもの意識とのズレから問いを生み出し、それを集約して学習問題(◎)を設定することにより、子どもの追求意欲を高め、自分なりの考えをもてるようにする。

「一斉授業が聴くことを求めるのに対し、ファシリテーションが効いている授業は、子どもたちに「聴き合う」関係性を育みます。クオリティの高い聴き合う活動は、学び合う、高め合う、つながり合う、温め合うことに直結しています。」

岩瀬直樹 ちょんせいこ『信頼ベースのクラスをつくる よくわかる学級ファシリテーション①—かかわりスキル編』
解放出版社 2011

手立て②

対話の質の向上

友達の発言に反応したり聴き合ったりする力を身に付け、子ども自らがファシリテーターとなることで、自分の考えと友達の考えをつなげたり比べたりしながら、自己の考えを広げ深める。

4. 分析方法

	実践①	実践②
対象者	令和5年度 西鱒田小学校6年1組32名	令和6年度 西鱒田小学校5年1組30名
単元	「江戸の発展と江戸町人の新しい文化・学問」	「おいしい米づくりをして自分たちの生活を支えてくれている人々」
期日	令和5年11月	令和6年7月
分析方法	授業記録と抽出児A・Bの記録から手立て①、②につながるものを抜き出し、手立ての有効性を検証する。	
A児	予想をもった上で追求することができている。しかし、 <u>分からない言葉が出てくると、途中で何をしているのか分からなくなる。</u> そのため、問題解決に必要な歴史事象をつなげて考え、分かりやすく友達に伝える姿を期待した。	資料を正しく読み取ることにより、多くの知識を得て、それを理解することが得意である。しかし、 <u>表面的な理解で満足する面が見られる。</u> そのため、友達との協働を通じ、理解したことからの考えをもつ姿を期待した。
B児	学習問題に対して一生懸命に考え、積極的に発言している。しかし、 <u>少し調べて自分の考えが合っていると判断すると、すぐに追求をやめてしまふことがある。</u> そのため、友達の考えとつなげたり比べたりする姿を期待した。	生活経験や資料の読み取りから得た情報について多角的に考えることができる。しかし、 <u>友達の発言を受けても、「～という考えもある。」と感想に留まってしまふ。</u> そのため、自分と友達の考えをつなげて、考えを広げる姿を期待した。

5. 授業の実際と考察

実践①

「江戸の発展と江戸町人の新しい文化・学問」

本時の◎

「なぜ歌舞伎が人気になったのか。」

手立て① 学習問題(◎)の設定の工夫

現代の「能」と「歌舞伎」の映像を見て比較。

児童の発言

「服装を見ると能は白っぽかったけど、歌舞伎は柄が付いている。」

「能は動きが遅くて、歌舞伎は歌に合わせている。」

「顔を見ると、能は面をつけているけれど、歌舞伎は白塗り」



歌舞伎座前には人々がたくさんいるけれど、なぜ室町時代の能と特徴が異なる歌舞伎が人気になったのだろうか？



◎なぜ歌舞伎が人気になったのか。



資料①歌舞伎座前の様子

A児の考え(予想)

「能は貴族とかの身分が高い人々が見てる感じがしたけど、歌舞伎は見る人の身分が貴族と違って、その間で流行ったんだと思う。」

→身分の違いに着目している。

B児の考え(予想)

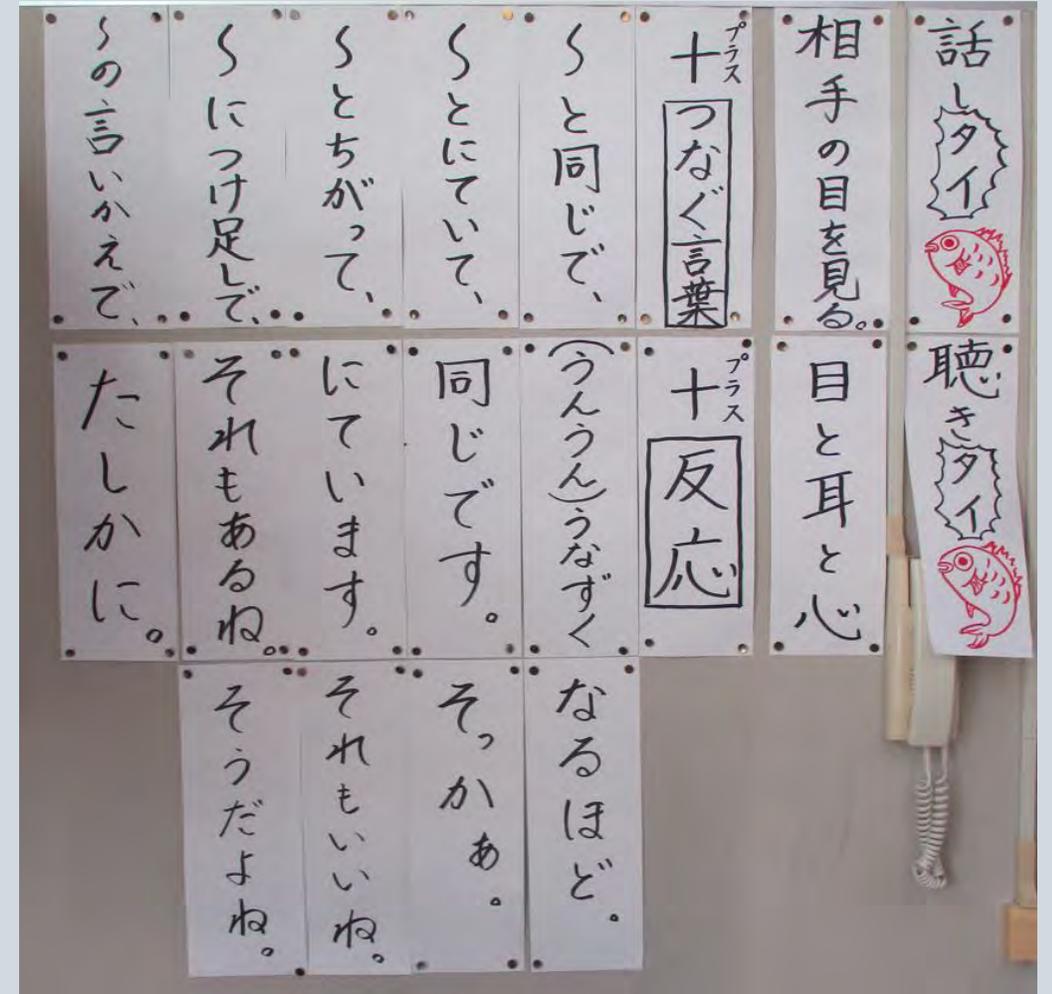
「能と歌舞伎を比べてみるのがいいと思うんだけど...」

→考える視点はもっているが、自分の考えをもてていない。

手立て② 対話の質の向上

友達の発言とつなげるための掲示を作成。
具体的なつなぐ言葉や反応の仕方は、社会科の授業だけでなく、様々な授業の中で子どもが使った表現を短冊に書いて増やしていった。

日々、聴き方がよかったり、「つなぐ言葉」や「反応」を活用したりしたときには、必ず褒めて全員が意識できるようにした。



教室前掲示

手立て② 対話の質の向上

予想で、歌舞伎を広めた人・観客の二つの視点が出たため、それにつながる資料を提示。

能



歌舞伎



近松門左衛門 武士から町人へ

近松は、元禄時代(1688年~1703年)を中心とした、町人文化を代表する人物のひとりです。ただし近松自身は、町人の出身ではありませんでした。近松は、元は武士の子弟として生まれています。しかし、浄瑠璃や歌舞伎の作者となるために、自ら芝居の世界へ飛び込み、町人として生きたのです。

江戸時代の人々は、「士農工商(しのうこうしやう)」とも表現される、厳しい身分制度の中で生活していました。特に、「士(武士)」と「農工商(庶民)」との身分差は大きなものでした。しかし、町人たちの、経済力や文化的なレベルが高まるに従い、近松のように、武士から町人になる人々が増えていきます。

近松の書いた浄瑠璃の中にも、武士から町人となった人物が登場しています。例えば、「山崎与次兵衛舟の門松(やまざきよじべえふねびさのかどまつ)」(享保3年(1718年)初演)に登場する山崎与次兵衛の妻は、元は武士の娘でした。しかし、同じ武士ではなく、裕福な町人である与次兵衛と結婚します。

また、「心中宵庚申(しんじやうよいごうしん)」(享保7年(1722年)初演)の八百屋半兵衛(やおやはんべえ)は、武士から町人の養子となっています。武士の出身であることに誇りをもつ半兵衛は、心中の母も武士のしきたりを守り、切腹して死ぬのです。

近松は、町人の世界の出来事を元に、世話浄瑠璃を書きました。これらの作品には、近松自身も高しめられた、身分制度や、「家」制度のしがらみが描かれています。世話浄瑠璃は、同じ時代に生きた当時の観客の共感を呼び、高い人気を得たのです。

近松は死の前夜に、武士から芝居の作者となった人生の来歴を、評世文に記しました。その評世文は、自らの肖像画に書き残されています。評世文が書かれた肖像画は、尾形子(えぼし)を着けた礼装で描かれており、近松が武士の出身であることを感じさせます。

一方、近松の書画を記す浄瑠璃の解説書「蘭波士農(なにわみやけ)」に描かれているのは、町人らしい姿で机に寄りかかり、筆を手にしている執筆中の近松です。

武士と町人の両方の立場で描かれた2つの肖像画は、武士から町人となった近松の人生を示す、興味深いものになっています。



町人らしい姿で描かれた近松

資料②近松門左衛門について

資料③舞台と客席の様子

手立て② 対話の質の向上

【A児のグループ 4名】

A児「絶対、能の方は貴族が見るものだと思うよ。」

D児「たしかにそうなんだよな。誰が見ていたかが重要。」

A児「能の方は明らか貴族じゃん。」

全員頷く。

(省略)

E児「ほら、こっち(資料②)に書いてあるよ。町人の作品
だって。」

A児「ほら、そうじゃん。」

(省略)

D児「能は貴族の娯楽で、町人の娯楽がほしかった。」

A児「そうそう。」

下線部の反応により、対話の始めは、観客に着目して話している。全員が【資料③】を見ている。

ここでE児が【資料②】を見て、【資料③】とつながる「町人」という視点をもつ。それをA児が拾い、考えをつなげていく。

手立て② 対話の質の向上

【B児のグループ 4名】

(資料③を見て…)

G児「何か食べてるよ。」

B児「どこどこ？めっちゃみんな食べてる。もしかして能は貴族しか見られなかったから、町人にとってはこれが初めての楽しみだったとか？」

H児「これ町人っぽい人ばかり。」

G児「それBさんが言っていることと同じじゃない？」

H児「だから能は身分が高い人が見ている。」

B児「そうそう、そういうこと。」

G児の発言により、B児の考えとH児の資料を見て分かったことの発言をつなげられている。それに対して、二人も反応して、対話が続く。

A児の振り返り

「Dさんや班の友達と一緒に話していて、自分の意見を言い合ってDさんと似ていてとても楽しかったです。Dさんと似ているところがいっぱいあったので分かり合えました。自分は、能を町人が真似してできたのが歌舞伎だと思いました。能と歌舞伎では見ている人が違くて、町人にとっての手軽な娯楽だからってというのが分かりました。」

→自分の予想にあった「身分の違い」という視点で、町人にとっての「手軽さ」「娯楽」を対話を通して気付いている。

B児の振り返り

「今までの授業などをもとに予想を立てることができました。そのあと、資料を見たり、班のみんなと話し合ったりして、近松門左衛門は、武士ではなく町人の生活を歌舞伎で表したかったのかな、と考えました。」

→対話を通して、近松門左衛門から「武士→町人中心の文化」の流れに気付きつつあるが、まだ悩んでいる様子が見られる。

考察

手立て① 学習問題(◎)の設定の工夫

○既習事項の能と歌舞伎の特徴が異なることを捉え、それが問いとなり、学習問題(◎)を設定できた。

△能と歌舞伎を比較すればよいという解決の見通しはもてたが、対話までに自分なりの考えをはっきりともてない子もいた。

手立て② 対話の質の向上

○友達の発言に反応したり、つなぐ言葉を言ったりして、グループ内で始めに着目した同じ視点で話が進行した。

△グループの中でほぼ発言しない子がいた。

→ファシリテーターとしての役割が弱い。対話が停滞。

5. 授業の実際と考察

実践②

「おいしい米づくりをして自分たちの生活を支えてくれている人々」

本時の◎

「なぜ機械を使っているのに、長い時間田んぼの作業をしているのか。」

手立て① 学習問題(◎)の設定の工夫

学校の周りの田んぼを所有しているKさんの米づくりについて学習を進め、前時には機械化によって米づくりの作業時間が大幅に短縮されたことを理解している。

前時の児童の振り返り

「機械のおかげで時間短縮にはなったけど、朝4時から肥料を撒いていて大変だと思いました。」

「機械のおかげで楽になったが、なぜまだ時間がかかる部分があるのか気になりました。」



機械を使っているにもかかわらず、Kさんの米づくりは時間がかかって大変そう。



◎なぜ機械を使っているのに、長い時間田んぼの作業をしているのか。

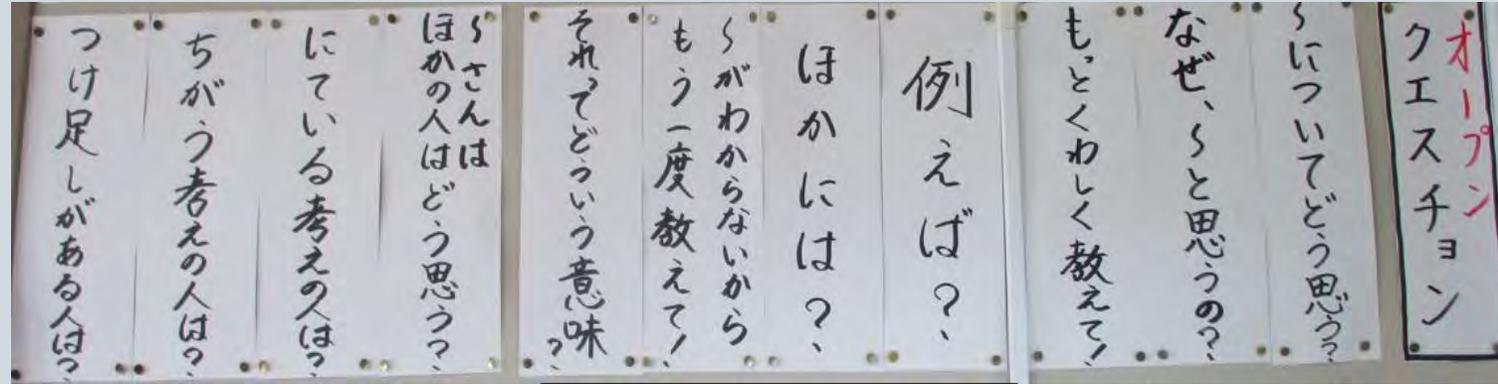
A児の考え(予想)

「毎日手入れや様子見をしないと草がかなりたくさん生えてきたり、米がおそらくおいしく育たなくなるから。」
→毎日の手入れや様子見などの作業と、米をおいしく育てたいというKさんの思いがつながりつつある。

B児の考え(予想)

「Kさんの田んぼは何個もあって、それでいっぱい田んぼの手入れをする機械を使っても、いろんなどころに行っ
て作業しなければいけないから。」
→田んぼの数の多さに着目している。

手立て② 対話の質の向上



教室前掲示

実践①の掲示に加えて…

オープンクエスチョンの掲示を作成。

「「イエスorノー」で答えられる単純質問や「AorB」で答えられる二者択一質問など、答えが予め狭められている問いを〈クローズド・クエスチョン〉と言います。これに対し、「どうしてそうなるのですか？」など、特に制約を設けることなく、答える内容も答え方も相手に自由に答えさせるような問いを〈オープン・クエスチョン〉と言います。」

堀裕嗣『教室ファシリテーション 10のアイテム・100のステップ』学事出版 2012

手立て② 対話の質の向上

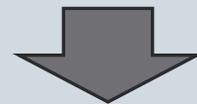
西鱒田小全校で行っている“ふむふむタイム”の活用。

「きのこのこの山派？たけのこのこの里派？」

「クラス全員で遊びに行くなら海？山？」

「休みの日の思い出を語り合う。」

子どもが話しやすい様々なテーマで対話の時間を設ける。



「目と耳と心で聴く。」などの聴き方スキルの向上
オープンクエスチョンを用いて対話を促進する練習

手立て② 対話の質の向上

Kさんの6月のある1日のスケジュールの資料を見て、自分なりの予想を立て、話し合う。

■さんの6月のある1日	
午前5時	起きる 朝食
6時	田んぼで作業
7時	
8時	
9時	
10時	
11時	他の仕事
12時	
午後1時	昼食
2時	田んぼで作業
3時	
4時	
5時	
6時	
7時	夕食

手立て② 対話の質の向上

【A児のグループ 3名】

A児「毎日田んぼで農作業するかというと、毎日手入れや様子見をしないと草がかなりたくさん生えてきたり、米がおそらくおいしく育たなくなるから、毎日農作業をしていると思いました。」

D児「なぜそうなったんですか？」

A児「ん？ そうなった？」

T 「どうしてそう思ったかってこと？」

D児「うん、そうそう。」

A児「この前、除草剤を撒くと言っていたし、手作業で草の対策をしないと。毎日観察しないとカメムシとかに米の甘い汁を吸われるみたいになって、おいしく育たなくなると思った。」

D児のオープンクエスチョンにより、米がおいしく育つために、「手作業での草の対策」「カメムシ対策」について、A児は具体的な事例を入れて説明できている。

手立て② 対話の質の向上

【B児のグループ 3名】

F児「手作業もあるからだと思う。」

B児「Fさんはどうしてそう思ったの？」

F児「全部機械でできるのなら手作業なしですすぐ終わると思うけど、手作業でやらなきゃいけないこともあると思う。」

(省略)

G児「機械ではできない細かいところを手作業でやっているから時間がかかると思う。」

B児「例えばどこを手作業でやっていると思う？」

G児「機械が届かないところ。」

F児「例えばちゃんと埋まっていないところを直す。そのとき手で直すんでしょ。」

B児のオープンクエスチョンにより、F児もG児も、自分の予想をより具体的に説明できている。

A児の振り返り

「わかったことは、田んぼのことだけで10時間以上も作業していることが分かりました。また、手作業や稲の様子を見ることにはかなりの時間を使うことが分かりました。気付いたことは、田んぼの様子を見るのは、午前午後合わせて2回もあるということです。そして、疑問に思ったことは、なんで2回も田んぼの様子を見るのかということです。」

→予想に合った「手入れ」や「様子見」について、時間に着目して理解したことを振り返っている。

B児の振り返り

「Kさんの田んぼは、いっぱいあるから時間がかかると思いました。友達と話し合って、作業する人数も少ないし、田んぼが遠く1日に2回も様子を見に行くから時間がかかることが分かりました。田んぼも多いし、その全ての田んぼの稲を観察するのに一人で1日に2回も見に行くのは、やっぱり大変だと思いました。」

→「田んぼの多さ」という自分の考えの視点に加え、「人数の少なさ」や「様子見する回数多さ」という新たな視点を獲得している。

考察

手立て① 学習問題(◎)の設定の工夫

○前時の時点ですでに、「機械化で作業時間が短縮されたはずなのに、まだ大変そう。」という意識をもつ子が多くいて、それが問いとなり、学習問題(◎)を設定できた。

△授業の全体的に、Kさんの具体的な米づくりのことを入れて考える子が少なかった。前時までには、もっとKさんを身近に感じる必要があった。

手立て② 対話の質の向上

○友達の発言に反応するだけでなく、オープンクエスチョンをして、友達の考えを具体的に引き出すことができていた。→ファシリテーター

△友達の考えを受けた上で、自分の考えを再構築することが必要。

6. 成果と課題

1. 既習事項と子どもの意識とのズレから学習問題(◎)を設定することによって、「なぜ歌舞伎が広まったのか。」「なぜ米づくりは大変なのか。」について意欲的に追求し、自分なりの考えをもてた子が多くなった。
2. 友達の発言に反応したり、オープンクエスチョンを使ったりすることで、対話の中で聴き合うことができ、互いに考えを広げ深めるための考えを引き出すことができた。
3. 社会的事象に対する正しい理解や友達から受けた新たな考えから自分の考えを再構築することなど、単元を通して子どもの問いと追求が連続するよう、授業を構成していく必要がある。

引用・参考文献

- ・岩瀬直樹 ちよんせいこ『信頼ベースのクラスをつくる よくわかる学級ファシリテーション①ーかかわりスキル編』解放出版社 2011
- ・堀裕嗣『教室ファシリテーション 10のアイテム・100のステップ』学事出 2012
- ・岩瀬直樹 ちよんせいこ『信頼ベースのクラスをつくる よくわかる学級ファシリテーション③ー授業編』解放出版社 2013
- ・澤井陽介『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』東洋館出版 2017
- ・中越社会科研究会『子どもが追求する社会科 第5集』めぐみ工房 2018
- ・文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』日本文教出版 2018
- ・佐藤正寿『図解 社会の授業デザイン 子どもの問いを深める49の視点』明治図書出版 2023

ご清聴ありがとうございました。
ご指導よろしく願いいたします。